

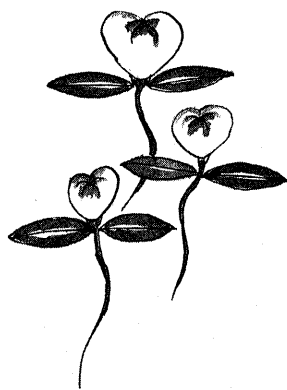
共感

松井 とし

夏の夕方、窓の下で突然小さな男の子の泣き声が出た。

三歳になったばかりかと思われるその子は、大きな声で泣きながら「僕、もう疲れて歩けない」と言っている。母親は「そんなこと言っても無理でしょ。ママはお荷物がこんなにあるのよ」と叱っている。おんぶかたっこをねだっているのであろうか。

男の子はますます激しく泣き続ける。母親の声も次第に大きくなり、イライラしている気持ち伝わってくる。



そのうち母親は道の向こう側へ渡ってしまつた。男の子はなお泣き叫んでいる。しかしよく聞くと「僕のところへ戻ってきてよ」と願いを交えて泣いている。でも母親にはこの言葉は聞こえなかったのだらうか。「じゅう数える内に来なかつたら行っちゃうから」と言つて「いち、に、さん」と数え始めた。そしてついに「じゅう！」と言つと、家庭菜園の間の小道を足早に歩き出した。

その瞬間、男の子は「ギャー」というような悲痛な叫び声をあげたかと思うと、母親の

後を追って走り始めた。

「疲れて歩けない」と言っていて泣いていた子が、渾身の力を振り絞って泣き泣き走る後ろ姿を、なんともいえない気持ちで見送った後、しばらく真つ赤に染まった夕焼けの空をうつろに眺めながら、いろいろなことを考えていた。

初めに「歩けない」と言っていて子どもが泣きだした時「疲れたね」と言っていて、母親が子どもの気持ちを受け止めていたら、そして次に「僕のところへ戻ってよ」と子どもが懇願して泣いた時、彼の言うとおりにしていたら、この子はどうしただろうか。

子どもの方は、その時その時の素直な心を表現しているのに、母親の関わり方は初めから終わりまで変わらなかった。大人は子どもの心を受け止める余裕をもたないのか、ある

いは子どもの心の変化に気づいても、子どもに添った関わり方をすることは子どもとの綱引きの勝負に負け「しつけ」に反するとも思ってしまうのだろうか。

幼稚園で日々生活を共にしていた時には、私も一所懸命が故に子どものつぶやきを聞きもらしたり、変化する子どもの心を受け止める余裕がなかったことだろうと思う。幼い人たちとの日常的な関わりを解かれて、今、私は彼らの柔らかな心に共感し、子どもの側に立った理解ができるようになったと感じている。

たまたま垣間見た母と子の出来事だったが、過ぎ去った保育の日々をしみじみ振り返りその時々、私の「意識と行動のずれ」を包み込むように許してくれた子どもたちのことを思った。

(元・幼稚園教諭)